

卒業に際して思うこと

千原 白山 坂本 誠平 小宮 隆夫
奥野 雅則 尾 山 洋
前 田 浩 豊 田 英

歯学部学生 畠 賢一郎

我々はこの6年間の学生生活の中で、本人の意志や経験とは無関係に各人『先生』の2文字を得ることを当然のことと感じてきた。既に臨床実習において、このことは実現されており、だれしも「——先生」と呼ばれるようになっていく。

当初、我々は臨床実習中に先生と呼ばれるごとに、もどかしさと辱しさの感を受け、つい先日まで互いに学友としての呼び名から「——先生」と呼ぶことへの異和感を禁じ得なかった。しかし日々を重ねるうち、この呼び名にも慣れが生じ、今では日常会話にもたびたび、出現する言葉となっているのである。

先生と呼ばれることの意味や是非は別としても、その功罪について我々が考えるとき、何ら根拠のない先生という敬称は、それが次第に日常化していくうえで、自らのおごりの原因となることには、注意を要するべきであろう。他者から先生と呼ばれ、その先生像が独り立ちをしたとき、自らの人格まで肯定し、以後の努力までも惜しむ結果となるのである。ゆえに『先生』の裏には、単に尊敬を意味するだけでなく、ちょう笑にも似た意味を含むことも無理のない事実であろう。「あの先生には困ったものだ。」など、軽んじた用いられ方をすることの方が現在の我々には、適合しているように思えてならないのである。

『先生』にはまた、他者からのアドバイスに対し、堅い殻を作ってしまうという一面を持ち合わせている。もし相手が直に先生と

思って相対したとき、この『先生』が障害となり、どれほど本音を隠し、多くのタブーの存在を認めているかは我々の経験上、理解に値する。それゆえ、先生という立場になってからでは、他者からのアドバイスに対し一層の注意を要し、かつ、その本質を捕える努力を怠ってはならないのである。さもなければ、ある分野では先生であったとしても、他では人間ですらなくなってしまうことも決して否定はできないのである。

『先生』の意味に気づいたとき、この二面性が我々の将来の姿を明快に表しているように思える。他者からの尊敬の念に値するか、それともちょう笑の対象としてのみ存在するか。この二極分化こそ『先生』の運命であり、特筆すべき点なのである。

私に関しては、単にモラトリアムの中で過ごしたこの学生生活も、今では若干恨めしく思う。しかし卒業に際してあらためて、社会人として、先生として、そのあり方をもう一度振り返る必要にかられ、こうして私なりの見解をまとめるに至ったのである。

せんせい【先生】 ①自分より先に生まれた人。年長者。②父兄の称。③自分より早く道を知っている人。先輩。④学芸に長じた人の尊称。⑤師事する人、教師の尊称。⑥医師などに対する尊称。⑦他人を親しみまたはからかって呼ぶ称。

『広辞苑』